

市立

いちかわ

自然博物館だより

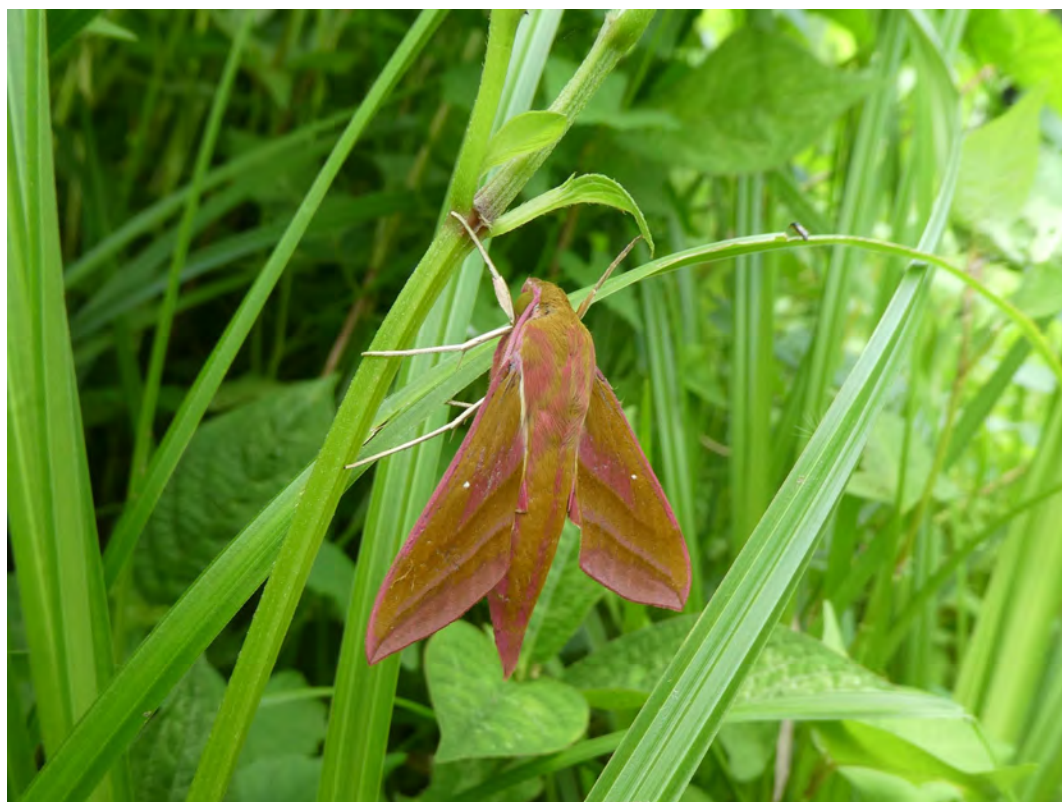
令和3年(2021年)

10-11月号

(通巻 196号)

2021年度

あたりまえの風景に
あたりまえの生き物に
あたらしいときめきがある！



自然博物館収蔵写真

ベニスズメ

スズメガは幼虫も成虫もわかりやすい外見です。長田谷津の湿地で、羽化したばかりのベニスズメを見つけました。

P1 ☀️ いきもの写真館
ベニスズメ

P2 ☀️ 市川市内の絶滅危惧種
— 貝 類 —
/ 4

P5 ☀️ いちかわの植物 30年
ニオイタデ
オオケタデ

P6 ☀️ くすのきのあるバス通りから
八幡のイソヒヨドリ

P6 ☀️ 展示室 飼育生物の話題
ニホントカゲ

P7 ☀️ わたしの観察ノート
7～8月の記録

P8 ☀️ ご案内

博物館だよりはカラー版をホームページでご覧いただけます。

市川市内の絶滅危惧種

－ 貝類 －

レッドリストは、絶滅のおそれのある野生生物をリストアップしたものです。新しく環境省より「環境省レッドリスト 2020」が公表されていますので、そのリストから市川市域に生育・生息する種類を抽出してご紹介します。第4回は貝類です。

（絶滅危惧の度合いの表記は、ローマ数字を算用数字に置き換えています）

「環境省レッドリスト2020」では、無脊椎動物について「昆虫」「貝類」「その他無脊椎動物」に分けてリストアップされています。昆虫は前号で紹介しました。今号では貝類とその他の無脊椎動物を取り上げますが、その他の無脊椎動物でリストアップされた中には「市川市史自然編」の目録に記載されている種類はありませんでした。そのため貝類だけの紹介となります。

前号の昆虫同様、貝類についても当館では市川市域における全体像を把握していません。そのため、昆虫の場合と同様、「環境省レッドリスト2020」にリストアップされた貝類のうち「市川市史自然編」の目録に記載されている全種類を掲載し、いくつかの種類について紹介していきます。

「環境省レッドリスト2020」掲載種

●絶滅危惧II類（VU）

マルタニシ

イボウミニナ

マシジミ

ハマグリ

●準絶滅危惧（NT）

ウミニナ

カワグチツボ

エドガワミズゴマツボ（ウミゴマツボ）

バイ

モノアラガイ

ウネナシトマヤガイ

ヤマトシジミ

オオノガイ

●情報不足（DD）

ガタヅキ（コハギガイ）

マルタニシ

絶滅危惧の度合い:絶滅危惧2類

市内の生息地:いくつかの淡水地

モノアラガイ

絶滅危惧の度合い:準絶滅危惧

市内の生息地:いくつかの淡水地

マルタニシは、一般の人が「タニシ」として認識している淡水性の巻貝です。田んぼに行けばいくらでも見られるイメージですが、田んぼそのものが無くなった市川市域はもとより、たとえ田んぼが多くある地域でも姿を消しつつあります。そのため絶滅危惧2類に指定されています

市川市域でもまだ何か所か見られる場所がありますが、もともとの個体群なのか、移入個体由来なのか、もうわからなくなっていました。

モノアラガイも淡水の池や湿地にふつうに生息する小さな巻貝です。ただこちらでもよく似た種類や外来種などが混在し、そ

れが本当にモノアラガイなのか、また、その場所固有の個体群なのかなどは精査が必要です。はたして市川市域固有のモノアラガイの個体群があるのかというと、それはもう何とも言えません。

日本の淡水域では有用魚種の移動が盛んで、それに付随した貝類や甲殻類の移動、また、個人レベルでの生息地以外への放流があたりまえのように行われた時代が長く、今では何を守ればいいのかすら、わかりにくくなってしまいました。

マシジミ

絶滅危惧の度合い:絶滅危惧2類

市内の生息地:長田谷津

ヤマトシジミ

絶滅危惧の度合い:準絶滅危惧

市内の生息地:旧江戸川河口(未確認)

スーパーなどで売られている「シジミ」はヤマトシジミという種類で、海の影響を受ける河口など汽水域に生息します。市川市域では旧江戸川河口が相当しますが、当館では確認調査を行っていません。

これに対し、マシジミは淡水性の種類です。かつては大柏川流域、国分川流域などにふつうに生息していたと思われます。現在当館で把握しているのは長田谷津です。その下流部にもいるかもしれません。ただ、マシジミに酷似したタイワンシジミという外来種が全国的に幅広く分布しています。マシジミとの判別もむずかしく、現場でぱっと見ての判断は困難です。

長田谷津で見られるものについては、とりあえずマシジミとしておきますが、タイワンシジミの可能性も大きく残ります。片や絶滅危惧種、片や外来種ですから大問題です。



マシジミ

1990年4月19日撮影 長田谷津

ハマグリ

絶滅危惧の度合い:絶滅危惧2類

市内の生息地:東京湾岸

一般に食用として知られる「はまぐり」には、ハマグリ、シナハマグリ、チョウセンハマグリがあります。このうち、環境省のレッドリストで指定されているのは、種としてのハマグリです。種ハマグリは、かつては東京湾で普通の二枚貝でしたが、現在ではほぼ絶滅状態です。さらに有用種として他所由来の種苗放流も行われ、仮に見つかっても東京湾固有の個体群のものとは言えない状況になってしまいました。

カワグチツボ

絶滅危惧の度合い:準絶滅危惧

市内の生息地:江戸川放水路など

エドガワミズゴマツボ(ウミゴマツボ)

絶滅危惧の度合い:準絶滅危惧

市内の生息地:江戸川放水路など

ウネナシトマヤガイ

絶滅危惧の度合い:準絶滅危惧

市内の生息地:江戸川放水路など

オオノガイ

絶滅危惧の度合い:準絶滅危惧

市内の生息地:江戸川放水路など

いずれも、江戸川放水路の干潟に生息する貝類です。行徳近郊緑地特別保全地区の干潟や東京湾岸の浅瀬や干潟にも生息すると思われます。

カワグチツボとエドガワミズゴマツボは大きさ数ミリの小さな巻貝です。潮が引いた干潟の水たまりの、水底の泥の上で見つかり、まるで黒いゴマ粒が泥の上を這っているように見えます。エドガワミズゴマツボの「エドガワ」は江戸川です。

ウネナシトマヤガイとオオノガイは二枚貝で、ウネナシトマヤガイは概ねアサリのサイズ、オオノガイは概ねカキのサイズです。江戸川放水路では泥の干潟を掘ると見つけることができます。



カワグチツボ

1990年8月1日撮影 江戸川放水路

ガタツキ(コハギガイ)

絶滅危惧の度合い: 情報不足

市内の生息地: 江戸川放水路

殻の大きさが1ミリ程度の、ごく小さな二枚貝です。1993年に江戸川放水路で採集された標本に基づいて新種とされました。採集記録自体は1981年に和歌山県で種類不明として採集されたものが国内初とされ、2000年代には東京湾の複数の場所でも記録されました。和名は、ここではコハギ

ガイの方を用います。

研究者の方の報告では、江戸川放水路の泥干潟では多数のコハギガイが採集できたものの、再度その場所を訪れた際は干潟の乾燥化や治水工事の影響で「様相が変わっていた」とされ、コハギガイ以上に「ウミゴマツボ」(本稿ではエドガワミズゴマツボの名を使用)の個体数が激減していたと指摘されています(岡本2012)。

カワグチツボ、エドガワミズゴマツボ、ウネナシトマヤガイ、オオノガイ、そしてコハギガイ、さらに前号で取り上げた海岸性ゴミムシ類や魚類で取り上げたトビハゼ、鳥類で取り上げたシギ、チドリ類などは、「干潟、特に泥干潟でしか生きられない、あるいは泥干潟を強く必要とする」生物です。これらの生物が弱いから絶滅に瀕するのではなく、生きるために必要な環境が激減して絶滅に瀕しているのです。

江戸川放水路は、扱いが難しい場所です。市川市域の住宅密集地にあり、治水や利用のことを軽視するわけにはいきません。ただ、泥干潟の価値が知られないまま葬り去られるようなことは避けなければなりません。

岡本正豊. 2012. 微小二枚貝コハギガイの千葉県4河口における棲息状況. 44pp. 自刊.



コハギガイ (岡本正豊氏寄贈標本)

1993年12月7日採集 江戸川放水路産
ひと目盛りが1ミリ

いちかわの植物 30 年

自然博物館の 30 年あまりの活動で得られた写真を用いて
市川市域の植物を紹介します。

ニオイタデ

ニオイタデは、触ると独特のにおいがするタデです。茎や葉に分泌物を出す特別な毛（腺毛）があるので、触るとベタベタして匂います。ハーブが匂うのと同じ仕組みです。珍しいタデで、市川市域ではじゅん菜池緑地だけに生えていて、長田谷津にも移植して保護しています。県内でも記録された場所は少なく絶滅危惧種？と思いますが、逆に近年は外来種という説が有力になりました。

繁茂して一面覆ってしまうような侵略性がないので、外来種であっても大切にしたい存在です。長田谷津では湿地の遷移が進んでほとんど見られなくなりましたが、湿地を掘り返すと地中の種子が芽生えて花を咲かせます。



ニオイタデ(1986 年 9 月 18 日)
長田谷津 遷移が進み減少した。

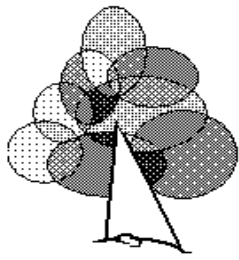
オオケタデ

大きな株になり花序も大きく、花色がピンクで目立つタデです。タデのなかまにしては珍しく葉が幅広で、名前のとおり毛がたくさん生えています。帰化植物と呼ばれる古い外来種で、江戸時代に観賞用に栽培していたとされています。撮影した頃（1986 年）はわざわざ畑に植えていたところもありましたが、写真のとおり野生化すると大きな群落になって繁茂します。

近年は見かけなくなりました。外来種として駆除されたというよりは、野草を育てて増やすような習慣（文化？）が廃れてきたことによると思われます。盗掘が減って良かった面もありますが、野草への関心も低下したようです。



オオケタデ(1986 年 9 月 13 日)
北方町 4 丁目 大柏川沿い



八幡のイソヒヨドリ

博物館ボランティアで、鳥の資料のバックナンバーを整理していると、「イソヒヨドリはなぜ内陸部に進出するのか…鉄道駅周辺で営巣…なぞ解き中」とあり、「やっぱり!」と思いました。本八幡北口のビルの屋上の角で、澄んだ高い声で鳴いているのをよく見かけます。東京駅の丸の内にもいました。アンテナや電線ではなく、平らなコンクリートの角が好みようです。

以前、伊豆半島の下田の防波堤で釣りをしていた時、イソヒヨドリがいい声で鳴いていました。消波ブロックの中に巣があるのか、出入りしていました。釣り

餌を取り換えた時、ふやけた方のイソメを近くに置くと寄ってきて食べます。駐車していた車のタイヤハウスに入り込んで、ひょっこり違うところから出てきたり、好奇心が旺盛なんだなと思いました。同じ鳥なのか判りませんが、次の日も近くまで来て、釣りの様子を見ていました。

温暖化をはじめ環境の変化などで自然界に住む生き物は、移動・順応・絶滅したりしますが、イソヒヨドリは海岸では棲みづらくなったのか、数が増えて新天地を開拓しているのか、もっと他の理由なのか、いつか解るでしょう。

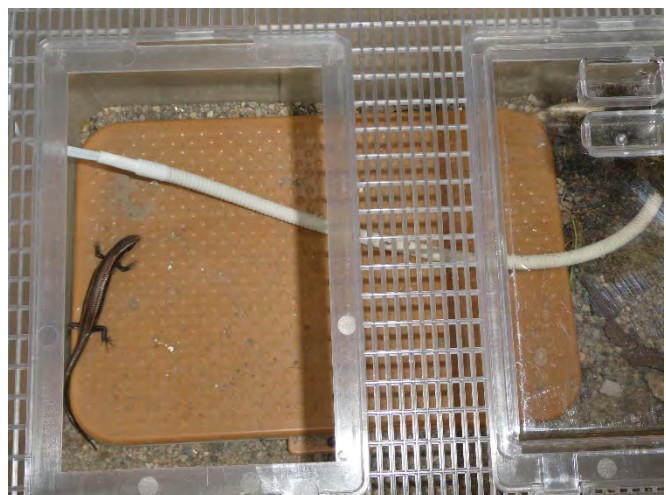
(M. M.)

No.40

展示室 飼育生物の話題

ニホントカゲ

爬虫類の飼育展示は人気があります。と言っても、アオダイショウの白化個体であるシロヘビをのぞけば、特に変わった種類を展示しているわけではありません。飼っているのはニホンヤモリ、ニホンカナヘビ、ニホントカゲくらいですが、当館に来てくれる子どもたちには、わりと人気があります。ニホンカナヘビがたいていの小学校で見られる反面、ニホンヤモリやニホントカゲは、特に町なかの子どもには珍しいからかもしれません。冷房の効いた展示室でのトカゲ類の飼育は案外に難しかったのですが、写真のように飼育ケースにペット用のパネルヒーターを入れてしまうことで解決しました。ニホントカゲはプレートの下に隠れ、時々上に出てきて体温を維持しています。





◆長田谷津より

- ・暑い日、セミの声が響く中、上空をサシバがゆっくり飛んでいました(7/29)。毎夏の光景ですが、サシバは急速に数を減らしているそうです。

金子謙一(自然博物館)

- ・斜面林でクマゼミが鳴いていました(8/11)。動植物園のtwitterには8月10日付けで鳴き声と姿の動画がアップされていました。
- ・ハンノキの幹にオオミズアオの成虫が止まっていた(8/20)。とても綺麗な雄で翅もきれいなため、羽化してすぐの個体だと思います。

◆大町より

- ・今年生まれの幼鳥が主体の40羽ほどのムクドリの群れが、動物園の第二駐車場に降りて餌を探していました(8/27)。低空を飛んだカラスに驚くと、一斉に飛び上がり大きなエノキの木にとまりました。

以上 稲村優一(自然博物館)

◆真間山南側斜面林より

- ・梅雨の晴れ間に、ミンミンゼミが鳴き始めました(7/6)。アオスジアゲハも元気よくとびまわり、夏の到来を感じさせてくれます。
- ・ツクツクホウシの鳴き声を聞きました(7/31)。いつもの年より早く気づきました。一週間後のきょう(8/7)は立秋、ミンミンゼミやアブラゼミにまじってたくさん聞こえます。季節が少しずつ進んでいるようです。

以上 M.T.さん

◆北方より

- ・市民の方から、アブラゼミの初鳴きを聞いたと連絡がありました(7/9)。

◆鬼高より

- ・おたまじゃくしがいた池のそばの草むらに、今年上陸した子ガエルがいました(7/7)。上陸してから日数がたっているのも、この草むらで生き延びているのでしょう。大切な町中のヒキガエルです。

◆原木より

- ・学校のプールにギンヤンマが来ていました(8/24)。ほかに、ショウジョウトンボとシオカラトンボがいて、シオカラトンボは産卵していました。

◆江戸川より

- ・ヒヌマイトトンボの調査に行きました(7/9)。直前まで雨が降った重い曇天で、ヨシ原の中の踏み跡を歩くと、ヨシの葉から水が落ちてきました。ヒヌマイトトンボはオスもメスも見られ、踏み跡を進むとヒヌマイトトンボが目の前で右往左往する状態でした。また、湿度が高かったことで行動範囲が広がったのか、ヨシ原の周辺のクズの群落でも、葉にとまる交尾個体を複数見ることができました。

以上 金子謙一(自然博物館)

- ・行徳橋の上から江戸川を見ると上流からアカガシラサギが飛んできて川べりに降り立ちました(7/9)。非常に綺麗な夏羽でした。

以上 稲村優一

梅雨明け後は酷暑、8月半ばには梅雨が戻ったような雨空が続き、猛暑がしばらく戻ると、今度は低温注意報が発令されました。酷暑、大雨、低温・・・さんざんな夏です。

自然博物館のwebサイト（ホームページ）を 調べ学習や事前学習にご活用ください

自然博物館のwebサイト（ホームページ）では、つぎのような素材（コンテンツ）をご用意しています。

○ オリジナル動画

- ・ グリーンスクールで訪れる大町公園の自然観察園（長田谷津）について、毎月の風景や動植物を動画で紹介しています。
- ・ 同じく長田谷津について、タヌキやノウサギ、オオタカなど、一般の観察では見られない動物の生態を、センサーカメラで記録した動画で紹介しています。
- ・ 展示や、学校への出張授業で用いた教育普及用動画が見られ、順次増やしていきます。

○ 自然観察週報

自然博物館の学芸員の観察記録です。1998年からのデータを1年ごとにエクセルのファイルで提供しています。すべて市川市内の情報なので、子どもたちのタブレットにダウンロードして調べたい生き物を種名で絞り込んだり、長田谷津や江戸川放水路など場所で絞り込んだりすることができます。たとえば野鳥の「カシラダカ」で絞り込むと、長田谷津では2011年を最後に記録がありません。その原因をテーマに調べ学習を発展させるのもおもしろいと思います。

○ 自然博物館だより

自然博物館が隔月で発行している読み物です。市川市内の自然の話題を取り上げているほか、分類学や生態学の立場で自然や生き物を解説した記事もあります。最新号および創刊号までのバックナンバーをPDF形式のファイルで提供しています（ダウンロードできます。古い号は準備中です）。自然博物館が発行したものですから、書かれている内容についてお問い合わせいただくことも可能です。記事について子どもたちとメールでやりとりできれば楽しそうです。

○ デジタル展示室

過去の企画展のパネルなどをご覧いただけます。今後、調べ学習に使いやすいように内容を更新していきます。

第34巻 第4号（通巻第196号）

令和3年10月1日 発行

編集・発行/市立市川自然博物館
（市川市教育委員会生涯学習部）

〒272-0801千葉県市川市大町284番地

☎047(339)0477